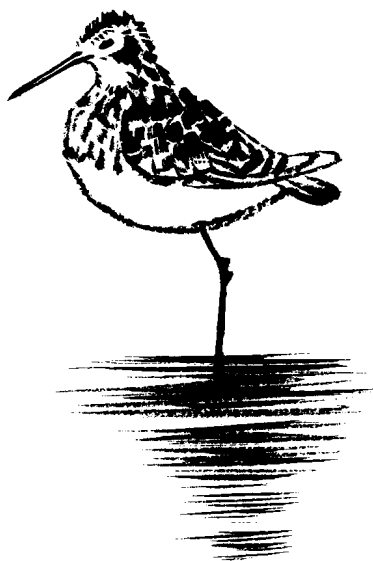


於母影

平野 謙



集英社

於母影

検印廃止

一九七二年七月二十五日印刷
一九七二年八月二十五日発行

定価 八九〇円

著者 平野謙

発行者 陶山巖

発行所 株式会社 集英社

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目二

電話 東京二六五―六一一

振替 東京 一五六五三番

印刷 大文堂印刷株式会社

製本 株式会社石橋製本工場

（乱丁落丁の本は本社またはお買求めの書店でとりかえいたします）

目

次

小熊秀雄

太宰 治

宮本百合子

永井荷風

外村 繁

宇野浩二

秋田雨雀

正宗白鳥

十返 肇

高見 順

亀井勝一郎

山本周五郎

勝本清一郎

七

三

七

四

元

三

美

元

六

六

二

二

三

壺井 栄 二五

広津和郎 二三

日沼倫太郎 二五

中山義秀 二四

伊藤 整 二六

三島由紀夫 二六

志賀直哉 二六

平林たい子 二四

火野葦平 二四

川端康成 二〇

作家の自殺 二七

あとがき 二九

装釘

吉岡堅二

於
母
影

(おもかげ)

小熊秀雄

実は私は小熊秀雄をほとんど知らない。生前三度逢ったことがあるにすぎない。そのささやかな思い出をここに誌すわけだが、そんな切れっぱしの記憶のうちにこの特異な詩人の風貌を泛びあがらせることなどはとてもできそうもない。しかし、私はやはり私の哀しみの心をその記憶の断片にこめるしかないのである。

はじめて小熊秀雄に逢ったのは、大井広介の書斎であった。去年のいつ頃であつたらうか、何かの用事で私が大井君を訪ねたら小熊さんが来ていて、大井君に紹介された。私は初対面の人には人見知りするほうなので、ただお辞儀をしただけでほとんど何も喋らなかつたが、小熊さんも大井君とばかり話していて、私には一瞥視もくれないような

態度であつた。私の挨拶に対しても「ふむ」というような言葉にもならぬ言葉を吐いたにすぎない。そのとき大井君とどんな話をしていたかは全然覚えていない。ただ『小熊秀雄詩集』の扉で見覚えているいかにも詩人くさい若やいだ風貌とはまるでちがつて、ずいぶん痩せて年寄りじみていたのにびっくりしたことだけ覚えてゐる。いま私は「もし『骨と皮』の人間を競争させる会があったら、私の知るかぎり直木三十五を選手に出せば、大抵の会で、一等は無理でも、二等か三等になれるであらうが、万代恒志を選手に出せば、いかなる会でも、段ちがひで、一等は間違ひない」云々という宇野浩二の文章を読んで、すぐ小熊さんのことを思い、ひとりで笑つたところである。小熊さんもしかに「一等は無理でも、二等か三等になれる」くらいには痩せていた。それと、もうひとつ覚えてゐるのは、そのとき小熊さんがたいへん変つたルパシカを着ていたことである。支那の海賊でも着ていそうな、赤や青の縫い取りした模様入りの実に派手な代物であつた。無論、小熊さんはその奇妙なルパシカだけを着ていたのではなく、それをチヨッキ代りにして、その上に背広を着こんではいたが、やはり私はへえと思ひ、堀田昇

一の『自由ヶ丘パルテノン』の主人公をすぐ連想した。これはとても気の弱い俺なんかのつきあえる人物ではない、のっけからそういう印象を受けた私は、その扮装だけで怖れをなして、小娘みたいに遠慮がちに小熊さんをみまもっているしか手がなかったのである。おそらくそのときも小熊さん一流の怪気焰をあげていたことだろうが、その外貌だけで私は圧倒され、話の内容なぞなにも覚えていない始末である。

そのつき小熊さんに逢ったのは、壺井栄さんの『暦』の出版記念会の席上であった。そのとき私はやむを得ない用事があった、一時間ほど遅れて行ったが、ちょうど小熊さんのまんまえしか空いている席がなかったので、私は小熊さんに黙礼してすわった。しかし無論小熊さんは私を完全に見忘れていて、今度は「ふむ」とも答えてもらえず、私は気づまりな思いをした。——私はわりかた眼の記憶がいいほうで、一度逢った人の顔はめったに見忘れるようなことはないのだが、それだけにいっぺん紹介されたくらいの人になれなれしく挨拶するのがいつも憚られ、そのまま失礼してしまうことのほうが多い。しかし、そのときは小熊さんの真正面に坐ったので、思わず挨拶してしまっ

て、案の定失敗した次第である。そのときの小熊さんのテーブルスピーチもあらかた忘れてしまったが、たいへんユニークなおもしろい話ぶりだった。なんでも詩人は癪をかぶらせなければ書けぬが、小説家は癪をなでまるめて書くほうがいいというような話で、細長い指つきで赤ん坊の頭をなでてるような手真似をしながら、咽喉に痰でもからまっているみたいになしゃがれ声で喋った姿勢が、いまでも目に残っている。——どうも私は批評家を忘れていくせに、中味は忘れっぽく、もののかたちのほうをよく覚えていくようだ。

それから間もなく、私はまた大井君の書斎で小熊さんと行き逢った。そして、それが小熊さんに逢った最後となった。今年の夏ごろのことであった。たしかそのときは小熊さんのほうが後からやってきて、私は小熊さんの顔を見るなり、立ち上って自分の名前をいい、先生に対する生徒みたいな挨拶をした。また黙殺されて気づまりな思いをしてはかなわんと思ったからである。その日の小熊さんはいへん愛想がよく、橋本正一の小説の悪口を喋ったり、少し見当外れとは思えないような近代娘氣質を私に説明して

くれたりして、私も座談に割りこむ気持のゆとりを見出した。しかし、そのときの小熊さんはまた前よりいっそう痩せていて、もう一度宇野浩二の文章を借りれば、今度は「いかなる会でも、段ちがひで、一等は間違ひない」ほどの衰えぶりであった。からまる痰をたえず懷中紙に取りながら喋るその声のしゃがれかたも以前よりずっとひどくなっていた。ただ眼だけが青く鋭く澄んでいた。機嫌のいい小熊さんの話に相槌うつてはいたものの、小熊さんは咽喉もやられているんじゃないのかなあと、私は哀しくいたいたしい気持でいっぱいであった。

私が帰ろうとしたら、小熊さんも一緒に帰るといい、千駄ヶ谷の駅まで一緒に歩いた。道々小熊さんは須山計一など昔の絵かき仲間のことを語った。やはり辛辣な、しかし全然毒氣のない悪口が主であった。何でも壺井さんの出版記念会のことから、そのとき実に数年ぶりで逢った須山さんの頭がずいぶん薄くなったのにびっくりした、と私がいいだしたのがきっかけになったと覚えている。ついでに言えば、出版記念会のこと、小熊さんは「あのときはたいへん失礼しました」とやさしい尋常な挨拶ぶりでい

い、私を面くらわせ、恐縮させた。

それから千駄ヶ谷駅のプラットホームまで、小熊さんはその独得の闘病法を話した。たいへん非科学的な闘病法で、私はちょっと反対しかけたが、その話しぶりの自信に押され、はあはあと聞くしかなかった。それに話としてはやはりおもしろい観察にとんだ独自の闘病法なので、私は黙って聞いていたのだ。小熊さんの乗る電車のほうが早くきて、小熊さんは人なつっこくもつと話したそうだったが、「じゃお大事に……」というようなことをいって私がお辞儀をしてしまったので、ひょろひょろ風に吹かれるような恰好のまま、すうっと電車に乗っていつてしまった。

その帰りに私は物哀しく憂鬱だったが、あれでいいんだ、あれでいいんだと自分自身にいいきかせて、そんなささやかな憂鬱なぞ追っばらおうとした。今でも私はあれでいいんだ、と哀しい詩人の運命をそのまま肯定したいのである。

(昭和十五年十二月)

太宰 治

ひややかにみづをたたへて

かくあればひとはしらじな

ひをふきしやまのあととも

太宰治はある文章の冒頭に、右の詩を引いていた。作者は生田長江。私は長江がいつこの詩を書いたか知らない。太宰の引用によって、はじめてこの男々しく哀しい詩を知ったにすぎぬが、その男々しさ哀しさは作者が生田長江であることによって、いっそう読者の心をうつ。ある意味で、宿業の病にたえて『ニイチェ全集』の訳業を完成し、

『釈尊伝』を執筆した長江の全生涯は、この詩を生ききったといっている。しかし、太宰治は——おそらく太宰もまたこの詩をひそかに彼の座右銘としたかったにちがいない。火を噴いた山のあととも知られぬように。ゆめ深夜の呻きなぞ人に洩らすな。それは太宰の希った生きかたの痛切なモデルだったかもしれぬ。しかし、ついに太宰はその詩を生きぬくことができなかった。その詩を心の楯に生きることが、やはり太宰にはかなわなかった。

いや、そもそもの出発から、太宰は胸の埋れ火をかきたて、かきたて、灼熱する炎として読者に強要する危険な道をえらばざるを得なかった。処女作『思ひ出』以来、われを許せ！と叫ぶ哀切な声を、業火にやかれるおのがすがたとして読者に強いることによって、辛うじてみずからは湖の静謐と化したいと希うしかなかったようである。『津軽』まで辿りついたとき、火を噴いた山のあととも知られぬように、と希った内奥の作業は一応完了したかにみえた。しかし、完了したのはその文学だったか、生活だったか。許された子、許された父としてのわがすがたは、まことのわれにたがわぬか。火を